

## 広島女学院ゲーンズ幼稚園みぎわプロジェクト

主は私の牧者であって、わたしには乏しいことがない。主はわたしを緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われる。(口語訳聖書詩篇23:1)

子ども・子育て新制度がスタートした2015年4月、広島女学院ゲーンズ幼稚園PTA『母の会』は『みぎわ会』と改名いたしました。名称を、神様が私たちのために備えてくださっている水辺を意味する“みぎわ”としたのは、乳幼児にとって母性的な養育が大切であることを踏まえた上で、母親だけでなく様々な立場の人が子育て・子育てにかかわり、分かち合い、支え合うことが大切であり、この会が幼稚園と連携して、子どもを真ん中に多くの人々のいこいの場“みぎわ”となればと願ってのことでした。

また、幼稚園も同じ時、新制度(内閣府管轄)の幼稚園となるか、また幼保連携型こども園となるかの幾つかの分岐点に立ち、様々な検討を重ねた結果、文部科学省管轄、学校教育法で定められているこれまで通りの幼稚園として歩いていくこととしました。が、その選択は、子ども・子育て支援をしないことを意味するものではありません。私たちは、これまでに、幼稚園としてできる子育て支援策を模索し、実施してきました。従来型の幼稚園ではあっても、これからも在園生及び地域の乳幼児親子のいこいの場“みぎわ”でありたいと願っています。これまでの取り組みとは具体的には、預かり保育や未就園児親子の広場であり、また今後、公的に求められているものは、一時預かりや学童保育です。2000年に始まった“たんぽぽ広場”と、2004年度から取り組んできた預かり保育“さくらんぼルーム”は、初期の内容から比較すると質的・量的に充実してきたと言えます。が、まだ多くの課題を抱えています。幼稚園ホールを主な活動場所としているため、園行事やみぎわ会活動との兼ね合いで時間的・空間的制限があり、専用の収納スペースや什器、洗面所がないなど、施設設備での問題が山積しています。さらには、これからも多様化するニーズに応え、支援活動を充実させるためには、質量ともに豊富な人材を確保することも必要です。保育を必要とする子の、あるいは未就園児親子の居場所を作るだけでなく、核家族化に伴い孤立化する育児・子育ての現状を踏まえ、不安を抱えている保護者あるいは、これから親になろうとする若い世代に、安心を提供し、希望をもって生きていくことを応援することも大切な課題の一つであると思います。

こうしたたくさんの課題を解決していく鍵が、実は広島女学院には与えられています。その鍵とは、幼稚園と大学の協同、“幼大連携”です。広島女学院大学には、管理栄養学科、幼児教育心理学科をはじめ、幼稚園教育や子ども子育て支援と深いかかわりのある学部、学科があり、専門性の高い教育・研究がなされ、そこで学びあう教員と学生がいます。子育て・子育ての様々な潜在的ニーズに応えていくことができるいわば専門家チームが揃っています。

具体的な例をいくつか挙げてみましょう。小学校教諭を目指す学生にとって、教育実習以外の場で小学生と触れ合うことができる機会は貴重です。例えば、広島女学院ゲーンズ幼稚園が学童保育に取り組むとしたら、幼稚園施設だけでなく“ぼうけんのもり”で自然と触れ合い、学生が野外活動のリーダーとなってその活動をコーディネートしたり、宿題や自主学習をサポートすることができるでしょう。学童保育という枠組みに入らない地域の小学生にも遊び場を提供しつつ、大きなお姉さんとして見守ったり、必要に応じて遊びをサポートすることもできるでしょう。高度経済成長期以降失われたとされる子どものタテのつながりと群れ遊びを再生することができるかもしれません。

管理栄養学科の学生が、食育活動の実践の場として、預かり保育の幼児や放課後の小学生と共におやつ作りを楽しむこともできます。また、料理が得意でない保護者が、自信と喜びをもって食生活を楽しむことができる学びや出会いの可能性も秘められています。国際教養学科で英文学や英語教諭を目指す学生にとっては、地域の小中学生と英語を通してふれあえる場ができるなら、実践的スキルを獲得することができます。日本語や情報、デザインなども同様に、子どもと学生のニーズを融合させていくことができるのではないかと考えられます。今現在

も、託児や行事のボランティアに多くの学生が参加してくれていますが、一時預かりや未就園児親子広場、預かり保育のスタッフとなるなど、今後さらに連携を深め充実させていけるはずで。また、私たち幼稚園の教職員が大学の心理学や語学、栄養学や発達支援、生物学や美術、音楽や体育などの専門家・研究者から学びを得、逆に保育者養成の教員や学生にアクティブラーニングの場を提供することを既に取り組みつつありますが、ますます広げ、深めていくこともできるはずで。広島女学院大学は2016年度にキャリアセンターを立ち上げます。まずは在学生及び卒業生を対象としてスタートする予定ですが、今後、幼稚園保護者も広島女学院ファミリーの一員として、大学の施設、各専門領域の学びや資格・免許の取得などの機能まで積極的に利用・活用していただくことができるようになるはずで。学生と大学教職員、幼児や学童、保育者や保護者の学びや成長のニーズ・課題さらには、幼稚園と大学の施設が相互的に機能することで、 $1+1=2$ ではなく3にも10にもなることが期待されます。

しかし、幼稚園と大学の間には広い雑木林の空間が広がっています。この空間によって、物理的にだけでなく心理的にも遠く隔てられて、一体感を感じる事が難しい状況でした。が、この20年の間、雑木林は子どもが遊び場とすることによって“ぼうけんのもり”となり、親しみのある空間となってきました。幼稚園の正課、あるいは課外のプログラムの中で、森の中で遊び込み、学び合い、多くの人交流を深める自然体験や環境教育活動をこれまでにたくさん積み重ねてきました。森のあちこちのゾーンに名前を親子でつけたり、草刈りや枝払いを手作業で進めながら遊び場や広場が生まれ、抜け道ができ、子どもたちの活動拠点となり、大学の授業や高校生対象のインターンシップでも森の授業を行うなど、大学と幼稚園が、親しみを持てる森でつながっていることを体感し、心の距離も少しずつ縮まってきました。そして、この12月の幼稚園親子参加型課外活動『ファミリーデー』で、幼稚園の駐車場から大学人文館の裏に通じる新しい道づくりにも着手いたしました。この道が、これからの新しい幼大連携の象徴となります。これまで、学生がアスファルトの道を遠回りして教育実習にやって来ていたところ、落ち葉のカーペットを踏みしめて森の道を歩き、野鳥のさえずりや木漏れ日のシャワーを浴び、季節ごとの森の自然とふれあい、子どもたちと過ごす時間を思い描きながら幼稚園へ向かうことになるのです。この道は、今回、ファミリーデーに参加して下さった親子のボランティア活動、まさに手づくりで整備が始まったところですが、大学側からも教員と学生のチームで遊歩道を整備し、いずれは森の中で二つの道が出合い、一つとなり、幼大連携の架け橋が完成することになっています。

今現在、実習生を一度に数十名受け入れる授業もあり、ロッカールームや実習事前準備室、カンファレンスルームの整備の必要性を感じています。また、一時預かりや学童保育をはじめとする子育て支援専用施設の整備や、3台のバスに対して1台分しかないガレージの増設、木工部をはじめとするみぎわ会クラブ活動のアトリエスペース、保護者の談話室（カフェコーナーや育児相談ルーム）、降園後に森で遊ぶ親子や地域に常時開放する広場、子ども・子育て情報交換の場など、多くの機能を併せ持つ、子育て支援・幼大連携センターが、この新しい道のそばにできることを夢見ています。

広島女学院は、2016年度、創立130周年を迎えます。この記念すべき年に、以上の未来構想“みぎわプロジェクト”を立ち上げます。この取り組みが、地域活性と子ども・子育て支援、みんなが活躍できる社会づくりに大きく貢献することと信じています。その必要性・重要性をご理解いただき、実現に向けて広く支援をいただけるよう、情報発信していきたいと願っています。

2016年2月18日  
広島女学院ゲーンズ幼稚園  
園長 高田憲治